

青丘文庫研究会 月報

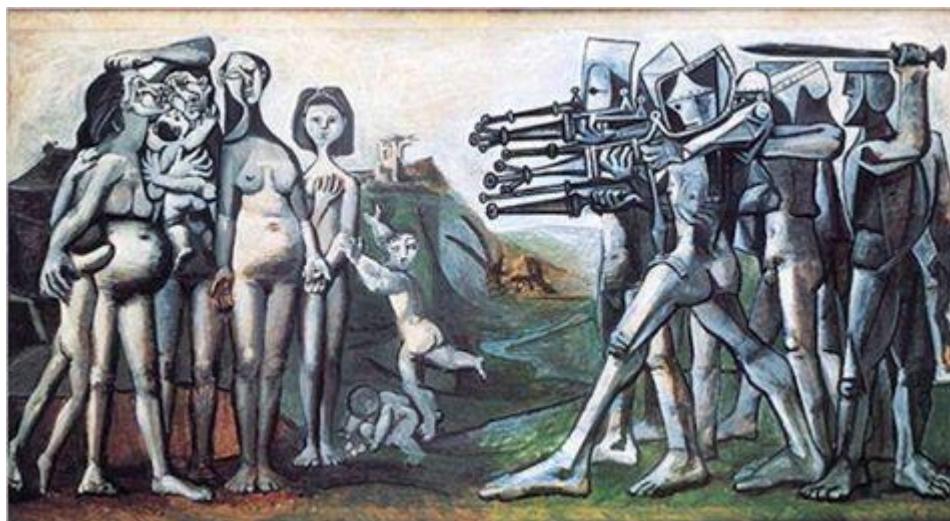
No.281
2015年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円
 ※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000円／年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

「Massacre en Corée (朝鮮の虐殺)」について —パリのピカソ美術館で

太田修



この3月に3週間余りパリに滞在する機会を得た。仕事は社会科学高等研究院とパリ第7大学で授業をし、Corée（韓・朝鮮、フランス語で「コレ」）研究者との研究交流を行うことだった。

決して「花の都パリ」を夢見ていたわけではないのだが、思い描いていたパリと実際のパリとのギャップは大きかった。日本よりも貧富の格差が大きく見えたし、トイレが少ないので往生した。それに、異郷にいる緊張感と言葉が不通であることからくるストレスは予想以上のもので、それがけっここうこたえた。

それでも地下鉄では無名の音楽家たちが奏でる音楽に一瞬肩の力を緩めることができたし、カフェではワインとパンを堪能できた。18、19世紀につくられたというパッサージュ (Passage、骨董品屋や古本屋などがあるアーケード街) も素敵だった。ペール・ラシェーズ (Pere Lachaise) 墓地には三度も足を運んだ。エディット・ピアフやイヴ・モンタン、パリコミューン側市民147人が銃殺された「連盟者たちの壁 (Mur des Federes)」を見るためだ。短期のパリ生活はなかなか大変だったのだが、全体として有意義なものだった。

パリの中のCoréeを見つけることも今回の滞在の目的の一つだった。いくつかのCoréeを発見したが、そのうちの一つを紹介したい。

フランス哲学・思想が専門の同僚がちょうどパリに来ており、彼とピカソ美術館を訪れた。その同僚の解説によると、ヨーロッパの絵画には1914年の第一次世界大戦の前後で絵のテーマや描き方、色づかいに大きな変化が見られるという。たとえば描かれる対象を注目すると、戦前はモネやルノワール、セザンヌなど印象派の絵に象徴されるように平穏な田舎の風景や人物が描かれていたが、戦争後には場末の民衆や人間の醜さ、退廃が描かれたりするようになるという。第一次世界大戦はヨーロッパの社会にそれほど大きな影響を及ぼしたということである。描かれた時代順にピカソ（1881–1973）の絵を見ていくと実際にそうした変化がわかつておもしろい。

美術館の地下1階、1階とピカソの絵やデッサン、彫刻を同僚の丁寧な解説を聞きながら見ていく。2階だっただろうか。なんと「Massacre en Corée（朝鮮の虐殺）」（1951年1月18日）が展示されていた。上半身が鉄で覆われロボット化したような6人の兵士が、裸で無防備の妊婦や子どもに、銃と剣を突きつけている絵である。全体的に薄暗い色で描かれていて、なんとなく迫力が乏しく見えるが、逆にそのことは戦争の不毛さを示しているのかかもしれない。

私はカミングスの『朝鮮戦争の起源』の表紙で初めて知り、その後に購入したピカソの画集で見ていたが、どこの美術館にあるか知らなかつたので、パリで現物を見られるとは思っていなかつた。現物を見るのは初めてで、横210センチ、縦110センチと思いのほか大きかったので、それが目の前に現れたときは、思わず「おーおおおっ」と歓声をあげてしまった。

このピカソの「朝鮮の虐殺」は、朝鮮戦争を扱った研究書や概説書では、1950年秋に起つた米軍による信川虐殺事件を素材としていると書かれことが多い。ウィキペディアでは日本語版も韓国語版もそのように書かれている。信川は朝鮮民主主義人民共和国の黄海南道信川郡にある。私は2012年に信川博物館を訪れ、被害者の遺品や写真、新聞記事などの展示を見た。墓地と900人余りの人々が亡くなつた防空壕も見た。生存者の方にも証言を聞いた。そこでは米軍が3万5千人余りの人々を虐殺したことが強調されていた。カミングスも『朝鮮戦争の起源』で書いているように、誰に責任があるのかについては文書で実証できていないのだが、はつきりしていることは信川で恐ろしい残虐行為があつたということである。

ただし、ピカソが信川虐殺事件のことを知りそれを素材に「朝鮮の虐殺」を描いたということは、私は確認できなかつた。美術史家の木下長宏氏は、2012年に日本で出された『戦争と文学1 朝鮮戦争』（集英社）で「戦争が始まる前、済州島で起つた武装蜂起とその弾圧、民衆虐殺を知つたピカソが制作した」と新説を提示しているが、根拠は示されていない。

また、同じく美術史家の大高保二郎氏は「当時、共産党員でレーニン平和賞も受けていたピカソは、抗議表明を余儀なくされたに違ひない。〔中略〕構図としてピカソはゴヤの『1808年5月3日』とマネ（1832–1883）の『マクシミリアン皇帝の処刑』を巧みに活用しつつ、しかし侵略者がだれであるか、政治的な立場を公にはしなかつた」と書いている（『ピカソ美術館 第4巻 戦争と平和』集英社、1992年）。私には今のところこの説明がしっくりくる。

結局、ピカソがどのような経緯で「朝鮮の虐殺」を描いたのかよくわからない。今後のピカソ研究に期待するしかないのだが、ピカソがフランスから遠く離れた朝鮮半島で起つた民間人の虐殺を描いていたことは事実であろう。この時代は一般的に、超大国どうしが直接軍事力で戦つたのではなかつたという意味で冷戦の時代と呼ばれるのだが、このすぐれた芸術家は、東アジアでは「冷たい戦争」ではなく、まさに戦争が起りそこで残虐行為が行なわれていたことを表現していたのである。

パリの中の Corée についてはそのほかに、19世紀末から20世紀始めに朝鮮に滞在したフランスの外交官であり収集家として知られている Victor Collin de Plancy (1853–1924)のこと、1950年代末からパリで活躍した李應魯 (1904–1989) という画家のこと、パリで暮らす韓国人のことなどを紹介したいのだが、別の機会に譲りたい。

第368回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2015年5月10日）

1928年、昭和天皇の即位の「大典」と朝鮮人 —鉄道建設の労働者の事故多発から見えてくるもの— 塚崎昌之

1928年11月、京都で昭和天皇の即位の「大典」が行われた。大正天皇は1926年12月に死去したが、「大典」までの二年間に、西洋列強と肩を並べる東洋の「大帝国」の元首にふさわしい盛大な儀式を準備することが求められた。直接的な費用だけで、当時の国家予算の1.1%にあたる約2000万円が使われた。昭和天皇が京都に滞在した11月7日から26日には、即位礼をはじめ、様々な儀式が行われた。9月20日から12月25日には、岡崎公園を中心に大礼記念京都大博覧会が開催され、97日間に318万人の入場者を数えた。大正天皇のときも大礼記念京都大博覧会が開催されたが、81日間の会期で86万人の入場者だった。天皇帰京後の12月1日から翌年4月20日までの五ヵ月間、即位礼の式場跡の一般参觀が許され、534万人が拝観した。

1927年に入ると「大典」に間に合うように京都内外の交通機関の新設・輸送力増強のための補充工事が急ピッチで図られた。新設工事は、新京阪鉄道（現阪急京都線）、奈良電鉄（現近畿京都線）、鞍馬電鉄（現叡山電鉄鞍馬線）、比叡山架空索道（現叡山ケーブル）、愛宕山鉄道平坦線・鋼索線（ともに1944年に廃止、現存せず）があった。それ以外にも、京都市電延伸工事や嵐山電鉄複線工事、昭和天皇が拝礼する桃山陵がある桃山駅の拡張工事なども行われた。これらの工事には膨大な数の労働者が必要とされ、その多くは朝鮮人労働者であった。「大典」が近づくと、工事は加速され、払暁から日没後までにわたる労働や、徹宵の作業も強いられるようになっていく。そのため、1928年5月から11月に事故が集中し、朝鮮人13名が死亡や生命危篤となった。事故は疲労で体が動きにくい、また、暗くて注意力が働かない早朝や夜に多く起こった。

そのような状況に、朝鮮人たちの争議も起こった。新京阪鉄道の向日町で起こった争議は、14時間半の労働時間中1時間半の休憩を与える、日給1円70銭を2円にしろ、藁小屋に10人もぶち込む様な状況を改善しろ、の三点を要求して起こった。地元小作人たちの農民組合の支援などがあったが、警察の徹底した弾圧により、敗北に追い込まれた。日本人請負業者が朝鮮人労働力をつなぎとめておくために、賃金未払い事件なども起きた。また、朝鮮人も少しでも条件がいい現場を押るために、朝鮮人同士の争いも起きた。このように、多くの朝鮮人犠牲者が出ていたり、トラブルが起きても建設元請業者は工事を「支障」なく進捗させ、ぎりぎり「大典」に間に合わせ、建設業者はその功を誇った。この1928年には、労働災害扶助法の制定が政府の手によって推進されていたが、業者の反発によって成立しなかった。朝鮮人の命はただ同然だったのである。その後、朝鮮人たちの闘いもあり、1931年に労働災害扶助法は不十分ながらも制定された。

「大典」関連工事に朝鮮人を必要とし、酷使したのに、「大典」に直接関わるような工事からは朝鮮人を排除した。また、全国各地で朝鮮人社会主義者、民族主義者への弾圧は過酷を極め、1か月近くにわたる検

束や朝鮮への強制送還処分を受けた。「聖なる天皇」に朝鮮人を近づけてはならなかつたのである。その一方で、日本社会から「排除」されることを恐れた朝鮮人たちは、「融和」団体を作つていった。

●青丘文庫研究会のご案内●

■第301回朝鮮近現代史研究会

2015年7月12日（日）午後3時～5時 「多奈川事件と『消されたマッコリ』」 伊地知紀子

■第360回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2015年7月12日（日）午後1時～3時 「強制送還めぐる李承晩政権の在日コリアン政策」 閔智煮

※会場 青丘文庫（神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。）

●第7回在日朝鮮人運動史研究会・日韓合同研究会ご案内

●日時：2015年8月8日（土）午後1時30分～8日（日） ●会場：神戸学生青年センター

●費用：参加費1000円（資料代込）交流会会費4000円（学生、韓国からの参加者は2000円）

●宿泊：神戸学生青年センターで宿泊できます。（3000円、相部屋）

●プログラム<8月7日（土）>13:30～17:30 研究会

報告①吳日煥「朝鮮人遺骨の送還に関する韓国・日本の政府間交渉」

報告②崔永鎬「1952年の『日韓漁業協定交渉に対する日本側基本方針案』」

報告③水野直樹「出入国管理庁初代長官鈴木一の在日朝鮮人政策論—国籍選択権の主張を中心に—」

報告④李杏理「敗戦前後のヤミ経済と朝鮮人の生活について」

18:00～20:00 交流会 ワイン酒場・びーあん

<8月9日（土）>フィールドワーク「タチソ」（案内：高槻「タチソ」戦跡保存の会）※詳細後日

●主催：在日朝鮮人運動史研究会関西部会（代表・飛田雄一）／在日朝鮮人運動史研究会関東部会（代表：樋口雄一）／韓國民族問題学会（ソウル、代表・鄭惠瓊）●申し込みは飛田 hida@ksyc.jp まで。

●朝鮮史セミナー 「戦後70年、日韓条約50年」

■7月29日（水）18:30 「戦後70年と在日朝鮮人」水野直樹さん

会場：神戸学生青年センターTEL078-851-2760／参加費：各回800円／主催：学生センター

【今後の研究会の予定】来月以降の予定。8月はお休みです。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセイの予定】9月号以降は、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】2015年度の青丘文庫研究会会員証を登録された方には本月報といっしょに送ります。会費は、年3000円です。学生で印刷版月報を不要という方には希望により会員証を発行します。飛田 hida@ksyc.jp まで連絡をお願いします。他に、図書購入募金2000円／年。在日研究会は5000円／年ですが、機関誌3冊が入手できますのでお徳ですよ。よろしく。